2　諸報告

1）上ノ國八幡宮本殿調査報告書

上ノ国町史跡整備検討委員会委員　　鈴木　亘・宮本長次郎　筆
上ノ国町文化財保護審議会特別委員　　羽深久夫作　図

1　八幡宮の創立と沿革

上ノ國八幡宮は、もと勝山館上にあって館神または館神八幡宮と呼ばれた。館神八幡宮の創立については、松前広長が安永９年（1780）に著した『福山秘府』の文明５年条に「松前年代記曰、是歳、八幡宮を上国館上に造立、館神と称す。」と記し、松前年代記の文明５年（1473）造立説を伝える。宝暦11年（1761）の「御巡見使応答申合書」もこれと同じである。文明５年は松前藩の始祖武田信広が上ノ国に居た時期であり、勝山館はこの頃築造されたと考えられている。

館神八幡宮は、その後元亀２年（1571）および天正10年（1582）に造替されたと伝えられる。『福山秘府』元亀２年条に「松前年代記曰、是歳、館神を上国に造立、夏五月二十一日供養、広正これを造る。」と記す。著者広長は、広正について「永安公之第五子蛎崎右衛門正広乎、」とする。永安公は四代蠣崎季広である。『新羅之記録』は季広の四男正広について、母は家女、子細あって天正６年（1578）夏に熊野参詣のため上洛して、安土にて信長公に謁し奉り、帰国して謀叛を企てたが本意を遂げずして、天正14年に秋田仙北に行き、高寺陣のとき腫物を煩い39才で死去したと伝える。季広の長男舜広と次男元広は永禄４年（1561）と同５年に各早死、四男随良は僧になったので、元亀２年頃、正広は勝山館の城代であったかもしれない。文明５年の創建から元亀２年造替まで100年弱である。一方、『福山秘府』天正10年条に「松前年代記曰、是歳、季広国を慶広に譲る。秋九月三日、館神を上国に再興、妙広修造。」と記す。元亀２年造替から11年後に再び造営したことになる。広長は、妙広について、何人か知らずという。広を末に付すことからすると蠣崎一門の者で、勝山館の城代であろうか。

勝山館跡内館神八幡宮跡周辺部の発掘調査によると、近世の社殿遺構である礎石建物跡の少し北寄りに間口一間・６尺、奥行一間・７尺の規模をもつ掘立柱建物跡が検出された。この遺構は中世における館神八幡宮の本殿跡と考えられ、同位置で建て替えが認められた。

慶長の初め、勝山館は廃止されたが、松前寺社兼町奉行の出先である「官府」が上ノ国に設けられた。寛文10年（1670）頃、明石尚政は檜山奉行を命じられ、上ノ国官府に派遣されたことが知られる。（松崎岩穂『続上ノ国村史』Ｐ466）江戸時代初期の館神八幡宮については、『福山秘府』（諸社年譜並境内堂社部）上国館神八幡宮の条に、天正10年造替の後、「元禄十二卯年造替。」が記されている。また、幕末の史料であるが、江良町の佐々木家文書「当国神社日記（当国神社年数控）安政四己四月佐々木延利（二拾歳）」（『続上ノ国村史』付録一、村内神社の記録の項、所収）に、館神八幡社について「寛文十二壬子年御造営。（元禄十二壬子御葺替）」を載せる。

寛文12年（1680）、元禄12年（1699）は10代松前矩広（機三公）が藩主のときである。矩広は貞享元年（1684）12月に従五位下志摩守に叙任され、翌２年８月に上ノ国三社を参詣した。矩広の時の造営とすると、『福山秘府』の伝える元禄12年造替の可能性が大きいと思われる。

元禄造替後に伝えられる八幡宮の造営関係資料に、現本殿の床上奥に置かれた壇の上板裏面に書かれた明和７年の墨書がある。壇は厚板の脚を左右両端より内に入った位置においてその上に上板をのせ、本殿内床上に置いただけの仮設の作りである。壇上に御神体を安置していたと推察されるが、内陣の体裁をもっていない。壇上板の裏面に、つぎの墨書が発見された。（『続上ノ国村史』による）

寄　附

一、本社柱一本	彦左ヱ門
一、　〃	権七
一、　〃	吉右ヱ門
一、　〃	喜兵衛
一、八尺八寸一本	善太郎
一、しころ板一枚	与四右ヱ門
一、六尺丸太一本	上野孫四郎
一、本社しゃくり板	三左ヱ門
一、しころ板一枚	与四右ヱ門
一、六尺桧板十一枚	矢代太兵衛
一、地福石五間	同人
一、松二間半一本	忠兵衛
一、えぞ松六尺一本	五郎治
一、一丈六寸一本	五郎左ヱ門
一、しころ板一枚	弥兵衛
一、えんじゅ一本	同人
一、しころ板一枚	五郎兵衛
一、えんじゅ丸太一本	豊部内中
一、はふ板	北村市右ヱ門
一、十四長五寸一本	同人
一、一丈五寸一本	弥三左ヱ門
一、　〃	同人

一、一丈五寸二本　　山本七太郎
一、板石十枚　　瀬戸勘右ヱ門
一、丸太一本　　定七
　于時明和七庚寅年六月吉辰日
　　諸願成就所　敬白

これは、明和７年の館神八幡宮造営の時、村人が寄進した材木と石材を壇板に記載して本殿に奉納したものである。寄進した材木中にある長さ八尺八寸、一丈六寸、一丈五寸、松二間半一本などの長材、および六尺丸太一本、えぞ松六尺一本などは、間口３尺９寸、一間社流造りの小宮である現本殿の用材とは思えない。同様に、六尺桧板十一枚、地福（覆）石五間、板石十枚なども本殿ではなく、覆屋の用材と見た方がよい。しころ板は覆屋の壁材であろう。このほか問題になるのは「本社柱」計４本、「本社しゃくり板」「えんじゅ一本」「えんじゅ丸太一本」の記事である。しゃくり板は相じゃくり板のことで、床板の用材であろう。本社は江戸時代に覆屋の意味に用いることがある。たとえば、上ノ國八幡宮の寛政12年修復時の棟札に「奉修復八幡宮本社一宇」と記す。これは、明和７年から30年後に行われた覆屋の修復と考えられる。したがって、柱４本としゃくり板は本殿もしくは覆屋のいずれかに用いられた可能性が考えられる。えんじゅ（槐）は落葉喬木で、堅木である。現在の本殿は桧材（アスナロヒノキ）が多く用いられている。その中にあって母屋柱と向拝の頭貫虹梁・象鼻および蟇股・斗・実肘木は堅木である。これらの材料が明和の墨書にある「えんじゅ」に相当するかどうかは詳しい調査が必要である。なお、向拝の頭貫虹梁と象鼻および蟇股・実肘木は材質だけでなく、それらの絵様や形が母屋の虹梁絵様や実肘木の形と異なり、年代が下ると考えてよい。

以上、明和の墨書にみえる材料は、「えんじゅ丸太一本」など未定の材もあるが、多くは本殿ではなく、覆屋の用材であったと推定される。問題になるのは「本社柱」が本殿と覆屋のいずれに用いられたかである。なお、現在の本殿は全体に木部の風蝕が少なく、建立当初から覆屋の内に安置されていたと推察される。これは明和の墨書からも窺える。

昭和57年度に行われた館神八幡宮跡周辺部の発掘調査で、方３間（12尺四方）の規模で、正面に１間向拝を付けた礎石建物の遺構が検出された。柱間寸法は正面中間６尺、両端間各３尺、両側面および背面各４尺等間、向拝間口６尺、奥行４尺である。正面より１尺５寸ほど前に出た所に縁の束石があるので、この建物は床板敷で正面に濡縁を付けていたことが推定できる。正面から２間目柱通りに検出された屋内２個の礎石は床束の石であり、同じ１間目柱通りの床束石は失われたと思われる。この礎石建物は覆屋であり、明治９年に現在地に移された八幡宮本殿はその内に安置されていたと考えられる。なお、発掘調査の遺構図によると、覆屋は掘立柱建物の時期があったらしい。

館神八幡宮のその後の沿革は、社蔵の棟札により江戸時代後期以降の修造が知られる。

１）安永９年（1780）７月21日、八幡宮尊体を修理した。願主は13代松前道広である。道広は明和２年(1765)12月に従五位志摩守に叙任され、同４年６月に上ノ国祖廟に参詣した。明和７年の八幡宮修理は藩主道広のときである。修理後、10年を経て八幡宮神体を修理したことになる。

２）寛政12年（1800）５月４日、八幡宮本社一宇を修復した。願主は14代松前章広。明和７年の八幡宮修理から30年を経ていた。本社は覆屋であろう。道広の長子章広は寛政４年10月に道広の後を継いだ。寛政12年の修理は５月の藩主上ノ国参詣に先立って行われたのである。

３）文政８年（1825）10月21日、八幡宮社殿一宇を修復した。願主は同じく章広である。作事奉行が置かれ、棟札裏面に棟梁一人、小工頭５人、木挽６人の名を記すので、覆屋は造替されたかもしれない。なお、この時、八幡宮に弓一張、矢二本が奉納された。

４）天保９年頃、八幡宮御鳥居二宇を建立した。藩主は松前志摩守良広である。

５）天保12年（1841）７月、八幡宮社殿一宇を修復した。願主は15代松前昌広である。

良広の養子昌広は15才の時、天保11年２月に従五位下志摩守に叙任され、翌12年４月、福山に帰った。天保12年の八幡宮修復は、藩主の上ノ国三社参詣に先立って行われたのである。同時に、毘沙門天王社の修理と医王山神社の建て替えが行われた。三社の造営は江差奉行が松前藩の命を受けて実施されたことが知られる。

以上、江戸時代後期から末期に行われた館神八幡宮の修造は主として覆屋の修理であったと考えられる。

明治維新後、明治９年（1876）３月に上ノ國八幡宮は郷社になり、それに伴い館神八幡宮は館上から麓の若宮社があった現在地に移され、若宮社を合併した。そして、江差の正覚院（曹洞宗）より譲り請けた金比羅堂を以って八幡宮の拝殿とした。現在の八幡宮本殿と拝殿がそれである。神社蔵の絵図によると、本殿は、移築当初石積の壇上に建てられたことが判明し、昭和10年頃、覆屋内に安置されたらしい。

２　上ノ國八幡宮本殿の年代観

（１）　上ノ國八幡宮本殿の構造及形式

本殿は一間社流造。柿葺。平面規模は正面1.18メートル（３尺９寸）、側面1.82メートル（身舎3.25尺、向拝2.75尺）。軸部は円柱土台建、頭貫拳鼻付、内法長押、半長押、

切目長押、腰貫、地貫。組物は出三斗実肘木付。中備なし。妻飾虹梁大瓶束。向拝繋海老虹梁。几帳面取角柱土台建、虹梁形頭貫象鼻付、連三斗組四斗実肘木付、中備板蟇股。正面飛檐打越二軒繁垂木、背面二軒繁垂木。正側面三方切目縁。脇障子、擬宝珠高欄木階五級登高欄、浜床付。縁束土台建、頭貫、腰貫、縁束間縦板壁。柱間装置は正面桟唐戸両開蝶番金具付、方立柱、小脇板壁、側背面横板壁。床は拭板敷。天井は化粧屋根裏、垂木・虹梁等の当初材に赤色塗料が部分的に残存。

後世の改造は向拝の虹梁型頭貫と板蟇股が様式上天保12年の修復による取替えと考えられる。屋根の箱棟・鬼板・箕甲・軒付部を鉄板で覆う形式と、縁廻りの縦板張りおよび板天井は明治９年に館上から現在地に移されてのち、昭和10年頃に再び覆屋内に安置されるまでの間に設けたものと考えられる。

（２） 上ノ國八幡宮本殿の建築年代

つぎに、現本殿の妻虹梁と母屋頭貫木鼻について、絵様刳形からみた年代感を述べる。本殿の妻飾りは虹梁大瓶束であり、古い形式を採用する。妻虹梁の絵様は木瓜形渦の巻込みが大きく張りがあり、その下部に小渦を付ける。全体に彫りは浅い。この形は上國寺本堂（宝暦８年）の虹梁絵様に近似し、ゆったりとした傾斜の袖切および幅の広い眉の形も上國寺本堂の虹梁に類似し、ともに洗練されている。これに比べると、上ノ国町にある清浄寺本堂（明和３年）の虹梁絵様は木瓜形渦がやや形式化している。袖切は傾斜が強く、眉の幅は狭い。また、八幡宮本殿の妻虹梁は渦紋のみで若葉をつけず古式であるが、上國寺本堂と清浄寺本堂の虹梁は、渦と少しはなして発達した若葉を伸ばす。八幡宮本殿は母屋頭貫に絵様木鼻を付ける。木鼻の絵様刳形は前三筆で左巻渦、上三筆で右巻渦をつけ、その渦を左右に配した形である。渦の巻込みはやや大きく力強い。絵様刳形からみると母屋頭貫・木鼻は妻虹梁と同時期の材と推定される。なお、八幡宮本殿向拝の繋海老虹梁は母屋柱側を柱天にのせ、向拝柱側を出三斗の実肘木で受ける。母屋柱側の絵様は渦の巻込みがやや少なく、下部に小渦を二つ連ねる。渦と少しはなして流麗な若葉が伸びる。向拝柱側は渦の巻込みがやや少なく、下部に小渦をつける。若葉はない。眉の幅は広く、下面に釈杖を彫る。妻虹梁の絵様とやや異なるが、洗練された意匠は共通する。

本殿の建設年代については妻虹梁、母屋頭貫木鼻などの絵様刳形は張りのある洗練された意匠であり、上國寺本堂と同時期もしくはやや遡る可能性がある。本殿の地垂木先端に反り増しが付くことも注意されるなど、様式上は元禄12年造替とするのが妥当である。以上のように当本殿は、上之国館（現国史跡上之国館跡　勝山館跡）に創建されて以来の由緒来歴が明らかであり、北海道最古の建造物として、保存良好かつ意匠的に優れて価値が高い。

参考資料

上ノ國八幡宮拝殿調書

上ノ國八幡宮拝殿　　木造　　一棟

時　代　　江戸時代（弘化２年・1845）

構造及形式　桁行３間、梁行４間
入母屋造桟瓦葺　正面一間向拝付角柱、
三斗組、中備・蟇股、妻飾・二重虹
梁大平束

説　明

現在の八幡宮の地は、もと大蔵鯵で知られる若宮明神社が鎮座した所である。若宮明神社は文明３年（1471）造立説（「東西堂社改之控」（享保３年６月）『福山秘府』所収）と慶長３年（1598）創立説（「文政五年小滝長門の神社書上」）がある。前者は館神八幡の若宮説、後者は大蔵法印秀海を祀るという説によるものであろう。神社蔵棟札によると、天明２年（1782）７月、若宮大明神拝殿一宇を造立、また、文政２年（1819）８月、若宮大明神本社一宇を再建した。文政５年の神社書上に、本社は方三尺、拝殿は間口三間、奥行二間三尺、神体は木像古作で明らかでないとあり、小社であった。その後、弘化２年（1845）９月に若宮大明神を再建した（棟札）。明治９年（1876）３月、上ノ國八幡宮は郷社になり、それに伴い館上の本殿は現在地に移され、若宮社は八幡宮に合祀された。現在の八幡宮拝殿は江差の正覚院より金比羅堂を譲り請け、明治９年に拝殿として建てられた。

拝殿は桁行３間（24尺）、梁行４間（24尺）、入母屋造り桟瓦葺の建物で、正・側三面に切目縁を付し、正面に軒唐破風のある１間（８尺８寸）向拝をつける。平面は前１間通りを外陣、その後の方三間を内陣とし、背後の中央間に張出部を設け、両脇間のうしろを物置とする。柱間寸法は正面中央間８尺８寸、両脇間７尺６寸、梁行各間６尺等間、向拝の出７尺２寸である。柱は５寸７分角柱を土台上に立て、切目長押、内法長押（正・背面中央間は虹梁）、頭貫で繋ぎ、頂部に台輪（木鼻付）を廻す。組物は皿斗付大斗を用いた拳鼻付三斗組、中備は蟇股、正面中央間のみ詰組１具と両脇に蟇股を入れる。正面の蟇股は牡丹唐草の彫刻、中央間の内法虹梁上に置いた大蟇股は波と草花の彫物で飾る。こうした彫刻装飾にあわせて、正面の頭貫に水波紋の絵様を刻む。軒は二軒繁垂木、両端で緩い反りをもつ。妻飾は二重虹梁大瓶束、三斗組の中備に蟇股を置く。

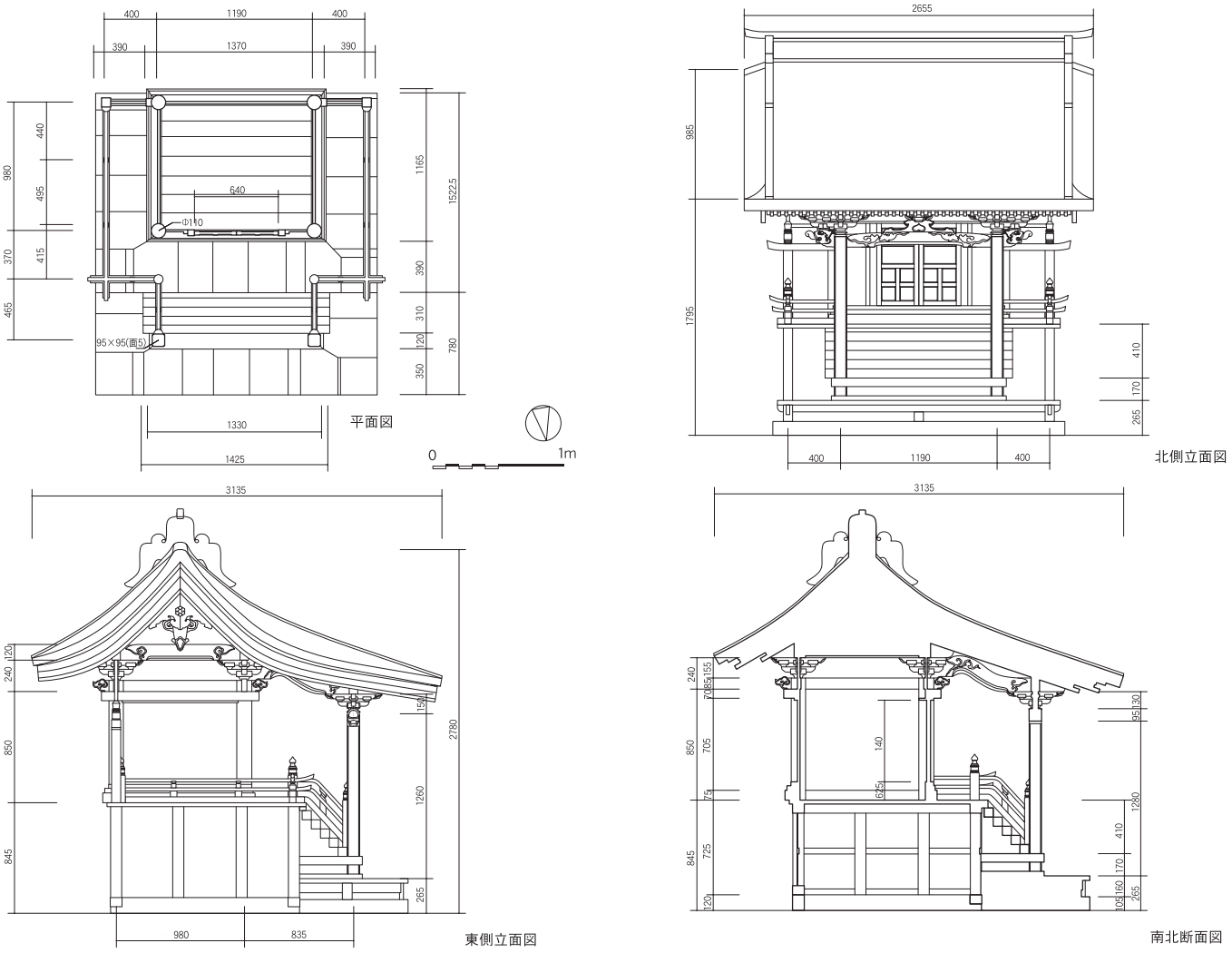
外側柱間の建具は正面中央間が花狭間格子のある桟唐戸４枚引違い、両脇間及び両側面前１間が中敷居上に蔀

戸、両側面中２間が蔀戸、後端間は腰板壁・上部漆喰壁である。各建具は昭和24年に新設されたもので、もとは正面両脇間と両側面前１間が各中敷居上に遣戸２枚、両側面中２間が遣戸２枚立であった。正面中央間は未詳である。

内部は内・外陣境に内法虹梁を入れ、床は内陣畳敷、外陣板敷、天井は内・外陣とも格天井である。内陣正面中柱と側柱を虹梁で繋ぎ、外陣左手隅間は中敷居を入れて間仕切りした時期がある。

向拝は石製礎盤に几帳面取の角柱（６寸８分５厘角）を立て、頂部を頭貫虹梁で繋ぐ。虹梁は表面に鶴と菊の浮彫り、根肘木に亀と水波紋を籠彫りし、木鼻に獏彫物を懸ける。組物は出三斗組、組物の小壁と軒唐破風の妻飾りは龍丸彫りである。繋の海老虹梁は表面に竹葉を浮彫りし、彫物の根肘木を付け、手挟は牡丹彫物で飾る。軒は二軒繁垂木である。

八幡宮拝殿は弘化２年に建設された江差の正覚院金比羅堂を明治に移築した建築である。入母屋造り桟瓦葺、正面に軒唐破風のある１間向拝を付ける。組物は拳鼻付三斗組、中備に蟇股をあげる。向拝廻り及び拝殿正面の蟇股、頭貫などに彫刻装飾を多用した幕末期における北海道を代表する建築の一つである。　　（鈴木亘）



上ノ國八幡宮本殿平面図

2） 上ノ国町洲崎館跡周辺の地形調査

上ノ国町洲崎館跡周辺の中世末期の水域に関する地形学的調査報告

小岩直人（弘前大学教育学部）

Ⅰ．はじめに

本報告は、北海道檜山郡上ノ国町の洲崎館跡周辺において、中世末期に存在していたと推定されている潟湖について、その存在の有無、または、その変化過程を検討するものである。具体的には、既存のボーリング資料の検討、ならびに新たに実施した地形断面測量、機械ボーリングによるコアの採取および各６種分析、ハンドオーガーを用いた地表地質の空間分布の把握を行うことにより、調査地域の地形環境変遷に関する考察を行う。

Ⅱ．上ノ国町の地形概観

はじめに、天の川河口部周辺における地形環境変遷を明らかにする基礎資料として、国土地理院発行の１万５千分の１の航空写真（1976 年撮影）を用いた空中写真判読を行うとともに、調査地域の海成段丘の区分を示した小池・町田（2001）を参照し、上ノ国町における地形分類を行った（図１）。以下にそれぞれの地形単位について説明を行う。

1. 海成段丘面

上ノ国町沿岸部、とくに天の川左岸側は中期更新世以降に形成された海成段丘面の分布が良好である。原歌や大崎周辺では、酸素同位体ステージ（以後MISとする）5eに形成された段丘面が連続的に発達する。MIS 5e は約12 万年前の最終間氷期であり、日本各地で広い海成段丘面が形成されたことが明らかにされている。また、上ノ国町では MIS 11（約 40 万年前）、MIS 13（約 50 万年前）までさかのぼる古い海成段丘面も分布している。勝山館跡などの尾根部に広がる平坦面は、段丘面としての広がりはもたないものの、MIS11 の段丘面と標高がほぼ同じであることから、海成段丘面の名残であると推定される。一方、天ノ川河口部右岸には、狭いながらもMIS5e に形成された海成段丘面が広がっているが、左岸ほど分布は広くはない。また、資料に乏しく詳細は不明であるが、北村付近には標高４～十数ｍ前後を有する段丘面が広がっている。この段丘面は完新世に形成されたものと推定されるが、他の段丘面に比べて急勾配となっており、MIS4 ～２の低海面期に形成された河成段丘面の可能性もある。

2. 海岸砂丘

天の川右岸側の内郷周辺においてはMIS5e に形成された段丘面が分布しているが、段丘面を被覆するような形態の砂丘が発達している（海岸砂丘Ⅰ）。この砂丘の頂部は標高 12 ～ 20m 前後を有し、洲崎館跡はこの地形上に位置している（図１）。また、この地形の南西側には、洲崎館跡が立地する地形よりも一段低く、北東～南西に延びる海岸砂丘Ⅱ（頂部の標高 9m 前後）も認められる。低位の砂丘を構成する砂の下位には偏平礫からなる砂礫層が認められ、砂丘の下位には砂州堆積物が存在していると判断される。後述するように、この砂州の存在が、潟湖を形成する上で大きく関与したものと推定される。

3. 沖積平野

上ノ国町の中心部は、天の川および目名沢川の流路とほぼ同じ高さで発達する沖積平野上に位置している。上ノ国町の沖積平野は、平野南西縁を流下している天の川や北東から合流する目名沢川の堆積作用によって形成された平野である。沖積平野上にはいくつかの河川の流路跡が認められ、天の川、または目名沢川が流路を激しく変遷してきたことがわかる。

Ⅲ．地形分布ならびに既存ボーリング資料から考察する地形発達過程

以上の地形面分布、既存のボーリング資料、ならびに従来の日本各地で明らかにされた臨海部の沖積平野の発達史を考慮して、上ノ国町における地形発達に関して若干の考察を行う。

上ノ国町が所有している既存のボーリング資料のうち、沖積平野上に位置する上ノ国中学校、公営住宅、上ノ国町役場庁舎、健康づくりセンター、上ノ国高校の５地点の位置図を図２に、柱状図を図３に示す。

これまでの研究により、約２万年前の最終氷期最盛期には、海面が現在よりも 100 ～ 120m 低下していたと考えられ海岸線は現在の大陸棚上にあったとされている（たとえば海津、2001）。MIS 5e に形成された海成段丘面や周辺の丘陵地は、最終氷期の海面低下に伴って大きく掘り込まれていたものと考えられる。また、河川最下流部に位置する現在の上ノ国周辺は、氷期には河川中流部に相当する環境であったと思われる。沖積層の基底にある砂礫層は、海面低下期の河川または扇状地の堆積物であり沖積層基底礫層とよばれる。上ノ国役場庁舎（地点Ｃ）のボーリング資料に示される標高-33m 以深の礫層や粗粒砂層は、これに相当すると推定される（図３）。最終氷期後の急激な海進である縄文海進は、日本各地で現在の海岸線よりも内陸部にまで海域となったことが指摘されている（海津・斉藤、2001）。調査地域においても縄文海進時には海域が広がったと推定されるが、沖積層基底礫層の上位のシルト層および砂層は、海進にとも

なって陸上で堆積した氾濫原堆積物、内湾化した海底において堆積した堆積物の両者が存在していると思われる。各地点においてこれらの細粒な堆積物の上位にある層厚３～６ｍの礫層（標高-5～１ｍ）は、縄文海進において形成された水域を埋積するデルタ堆積物であると推定される。日本の各地のデルタフロント堆積物の下位には、中部泥層（井関、1983）とよばれる泥質な堆積物がみられ、縄文海進以降の海底の堆積物であることが指摘され、その中にはデルタフロントの前縁に発達するプロデルタの堆積物が含まれていると考えられている。一般的な日本のデルタでは、デルタフロント堆積物が砂であることを考慮すると、デルタフロント堆積物が粗粒な砂礫層からなる本地域では、デルタフロント堆積物の下位の砂混じり砂層を挟在するシルト層は、中部泥層に相当するものと考えてことができる。各地点においては、デルタフロント堆積物の上位には、層厚数 10㎝ ～ 2m のシルトまたは粘土層が認められる。これはデルタ表層部を構成する陸成のデルタプレーン堆積物であると判断できる。

これまで、本調査地域の沖積層を構成する堆積物の年代測定や、環境変遷に関する諸分析は一切行われていないことから、洲崎館跡周辺の地形環境を復元するためには、資料の蓄積が必要不可欠である。

やや強引ではあるが、従来、明らかにされてきた日本の沖積平野の発達史を考慮すると、本調査地域でも、最終氷期の谷掘れ、縄文海進における内湾が形成、その後のデルタによる水域の埋積が進行したと推定することができそうである（図４）。また、前述のように、天の川河口部右岸には砂丘（海岸砂丘Ⅱ）に被覆された砂州（砂嘴）が発達している。この砂州（砂嘴）は、堆積学的には海進時に形成されると考えられているバリアに相当するものと思われる。おそらく、このバリアは縄文海進時に形成されたものであり、縄文海進によって形成された内湾を日本海と隔てて、潟湖を形成したと推定できるであろう（図３）。すなわち、砂州（砂嘴）の形成により潟湖が形成されていたものと考えられる。その潟湖は、天の川や目名沢川が運搬する土砂によって形成されるデルタの前進によって埋積が進み、縮小して現在に至るものと考えられる。

ところで、図３に示したデルタフロント堆積物の上面は、地点によらず海抜 0m 付近となっており、その上面を連ねた面は、ほぼ水平に広がっている。この事実は、この砂礫層が陸上において扇状地的な環境や河川の氾濫原で堆積したのではなく、水域に堆積したデルタフロント堆積物であることを支持するものである。また、このデルタフロント堆積物は、向浜から上ノ国高校付近まで分布することが確認出来ることから、この地域までは少なくとも縄文海進以降に水域であった可能性が高いであろう。

Ⅳ．向浜地区の地形環境の復元

以上のような地形発達史を考えると、洲崎館跡周辺において推定されている水域は、次の２つの可能性が推定できる。

①縄文海進によって内湾（あるいは砂州の形成に伴った潟湖）が、天ノ川あるいは目名川によって埋積されていく過程で、埋め残された水域。

②縄文海進によって形成された内湾（またはラグーン）が砂礫層によって埋積つくされた後の天ノ川（または目名川）の河道、あるいは旧河道。

この２点の可能性を検討し、中世末期に潟湖の存在が推定されている洲崎館跡周辺の古地理を復元するため、調査地域の沖積平野（氾濫原）に位置する計５地点において深度２～ 10m のボーリングを実施した（図５）。ここでは、採取されたコアの層相観察、14C 年代測定、粒度分析を行うことにより、その堆積過程、古環境に関する考察を行った。３地点の柱状図を図６に、粒度分析結果を図７に示す。

向浜の調査地域の中央部に位置する No.2 では、深度 10m まで掘削し、最上部には層厚約 1.5m 極細粒砂～粗粒砂からなる砂層、その下位には層厚４～５ｍの砂礫層からなるデルタフロント堆積物、さらに下位には中部泥層に相当するシルト層が層厚２ｍみられる。シルト層の粒度組成は、0.1mm 前後の細粒砂を多く含んでいるもののシルトの含有量が高い（図７）。最下部のシルト層は縄文海進以降に堆積した内湾またはラグーン底に堆積した細粒な堆積物であると思われる。このシルト層の堆積、すなわちこの地点が内湾またはラグーンであった時期を検討するため、３点の年代試料を採取し、（株）加速器分析研究所に測定を依頼した。採取試料は、下位から、コア中に認められるシルト層の最下部の木片、シルト層上部に挟まれる木片、砂礫層に挟在しているシルトの薄層から得られた木片である。年代測定結果は、深度 7.40m の木片が 7,190 ± 30yrsBP（IAAA-100743）、深度 5.57m の木片が 6,750 ± 30yrsBP（IAAA-100742）という縄文海進ピーク頃の年代を示す。また、礫層上部に挟まるシルト層中の木片からは 1,580 ± 20yrsBP（IAAA-100741）という年代値が得られた（図６）。

洲崎館跡前の No.3 地点では、深度 2.1m のコアを採取した。深度 2m よりも下位には砂礫からなるデルタフロント堆積物がみられる。堆積物は、下位から層厚 20㎝の粗粒砂層、層厚 10㎝ のシルト層、層厚 1m の極細粒砂層、層厚 1m のシルト層が堆積している。粒度分析結果では、デルタフロント堆積物の上位の砂層（深度 1.8m）はシルトサイズと中粒砂サイズの粒径の２つのピークがみられる（図７）。上位になるほどシルト分が増加する傾向がある。これは、ある程度流れがあった水域が、徐々に静水域となっていった過程を示す可能性があ

る。

年代値は、デルタフロント堆積物の上位のシルト層中の木片（深度1.70m）から220 ± 20yrsBP（IAAA-100740)、その上位の極細粒砂層中の木片(深度1.25m)から150 ± 20yrsBP（IAAA-100739）が得られた（図６)。ところで、このコアの深度1.50mには、1640年に駒ヶ岳の噴火に伴って降下した駒ヶ岳ｄテフラ（Ko-d：町田・新井、2003）が挟まれている。1640年に降下したKo-dと下位の木片の年代値（約220年前）が逆転し、後者の方が新しい年代を示しているが、これは、植物等による堆積物の攪乱があった可能性があることを示すと考えられる。

No.3の砂礫層の上面は、明らかにNo.2のコアよりも低くなっている。これは、既存ボーリングの検討結果とは異なり、本地域ではデルタフロント堆積物の上面が平坦ではなく起伏があることを示す。この起伏の空間分布を明らかにするため、向浜地区で実施した断面測量、および約80地点でハンドオーガーによる試掘を行った(図８)。ハンドオーガーによるボーリングでは、ある程度の層厚を有する、粗粒砂以上の粒径の堆積物を掘削することは困難である。また、本調査地域では粗粒砂はデルタフロント堆積物の直上にあることから、ハンドオーガーで掘り込むことができる下限高度を砂礫層上面とし、その分布を明らかにする。これらのデータから作成した地形地質断面図を図９に示す。また、その際にKo-dは中世末期の年代を直接示すテフラではないものの、テフラのやや下位が対象となる中世末期の層準であることから、Ko-dの出現高度も断面図上に示す。

A-B断面、A-C断面ともに沖積平野は、標高１～２ｍの高さを有する。また、A-B断面では向浜地区生活改善センター側（B)、A-C断面では州崎館側（C）が地形的には数十 ㎝ 高くなっている。図９で明瞭に示されるように、地表面が高くなっている向浜地区生活改善センター側および洲崎館跡側の地表面下には、幅30～40mの凹地が埋没しているのがわかる。また、Ko-dの分布高度を連ねた同時面も凹地状の形態をしている。これはKo-d降下当時にはすでに凹地地形が存在していたことを示唆する。凹地の基底は標高－1m前後となっており、それ以外の低地中央部では砂礫層上面は標高０～1mとなっている。この凹地は向浜の街道と平行に弧を描き三日月状に分布している。

GISソフトのArcView10を援用し、地表面測量で得られた標高、ならびにハンドオーガーを用いて明らかにされた砂礫層の上面高度を用いて、調査地域のデルタフロント堆積物の上面の起伏の平面分布、空間分布を示したのが図10・図11である。この図からも明瞭な凹地が連続している様子がわかる。このような埋没凹地は、その三日月上の分布形態から、デルタフロント堆積物の堆積後に掘り込まれた河道跡である可能性が高い。この埋没地形は、明治29年測量の地形図、大正６年測量の地形図には、目名川の流路となっている部分と一致している。このことは、埋没凹地が明治時代以降の目名川によって形成された可能性も指摘できるが、埋没凹地を埋める堆積物からKo-dが認められること、約220年前という年代測定値が得られていることなどから、埋没凹地の形成は、明治時代を大きく遡ることは間違いない。

Ⅴ．考察

向浜地区における水域の古環境を復元するため、No.2コアの深度５ｍ以深のシルト層、河道が存在していたと思われる凹地基底部（No.3コア）などの花粉分析・珪藻分析を実施した。サンプリングはNo.3の深度0.5～1.8m、No.2コアの深度5.5～7.5mにおいて約20～30cm間隔で行い、台湾国立大学Institute of Ecology and Evolutionary BiologyのLiang-Chi Wang氏に分析を依頼した。花粉および珪藻ダイヤグラムを図12に示す。

本報告では、珪藻分析の結果をもとに検討する。No.2のコアのデルタフロント下位のシルト層（内湾堆積物)、およびNo.3コアの深度0.5～1.8mではThalassiosira属などの海生の珪藻がみられるものの、その多くは破片の状態となっている。また、No.3のコアの下部では淡水生の珪藻もみられる。しかしながら、これらのコアでは、珪藻の含有率が低い上、珪藻が破壊されている状態であるため種レベルまでの同定をすることが困難であり、詳細な水域の環境を復元するには至らなかった。

さらに、堆積環境を検討するために、堆積物中のイオウ分析を鹿児島大学教育学部の伊藤晶史准教授に依頼した。イオウ分析は、堆積環境の復元には有効な分析法であることが指摘されており、堆積物中の総イオン含有量が0.3％以上である場合には海域での堆積、それよりも少ないと陸上（淡水）での堆積とされる（佐藤、1995)。その結果、No.2のデルタフロント堆積物下位のシルト層では1.14％（深度7.40m)、0.50％（深度6.25m)、0.57％（深度5.50m）といずれも海成の堆積環境を示した（図６)。これは、デルタフロント堆積物下位のシルト層は、縄文海進以降の内湾またはラグーンの海底堆積物であるという層相観察の結果を支持するものである。

洲崎館跡周辺において中世末期に存在していた水域の可能性として、縄文海進以降に形成された内湾の埋め残し（前述の①）が想定できる。しかし、調査地域では海成の水域が存在していたと考えられるものの、その時期は、縄文海進ピーク頃であり、これらは少なくとも1600年前頃には、砂礫層により埋積が進行していたものと考えられ、調査地域では中世末期まで埋め残しによる水域が存在していたとは考えにくい。

これに対して、調査地域に埋没している三日月状の凹

地は、デルタフロント堆積物によって内湾（またはラグーン）が完全に埋積が終了した後の、天ノ川、または目名川の流路、または旧流路（前述の②）が存在していた可能性を指摘するものである。前述のように、この凹地を埋める堆積物中の深度 1.7m の木片から約 220 年前という年代値、深度 1.50m 前後に Ko-d が挟在している。これらの試料は、砂礫層上面の凹地の基底付近の堆積物から得られたものである。掘り込まれた凹地は過去に河道が存在していたものであり、その直上に堆積する細粒な有機質堆積物は、河道本流が放棄されたために堆積を開始したものと考えられるであろう。すなわち、この河道の本流が放棄された年代は Ko-d の降下を若干遡る時期であると思われる。

本報告で明らかになった埋没凹地付近では上ノ国教育委員会が向浜地区の発掘調査を実施している（上ノ国町教育委員会、2001）。その報告書によると第 6 調査区において、Ko-d を含む江戸時代初期の層準の下位から、木製品がみいだされ、その時代は確実に江戸時代初期以前のものであることが報告されている。以上の事実から、この凹地状の地形は少なくとも江戸時代初期以前には存在していたと判断することができ、中世末期の時代まで遡る可能性は十分に考えられる。また、現在の天の川や目名川の河床には砂礫が堆積していることから、埋没している凹地を埋積している堆積物が細粒であることは、当時存在していたと思われる水域は砂礫を運搬・堆積させるような本流性のものではなく、本流とは切り離された比較的静穏な環境であったと推定できる。Ko-d は細粒堆積物に挟在することから、江戸時代初期にはすでにこのような環境下にあったと思われる。

凹地を埋める堆積物である No.3 におけるイオウ分析結果は 0.00％（深度 1.95m）および 0.07％（深度 1.75m）と淡水の堆積環境を示している（図６）。ただし、海生の珪藻の破片、および淡水生の珪藻がみられることから汽水の環境にあった可能性もある。

江戸時代初期の海水準は、現在とほぼ同様であると考えられる。また、本調査地域は、天の川、目名川の最下流部に位置しており。河川の水面高度または潟湖の湖面高度はほぼ標高 0m である。これらをふまえると、調査地域において復元されたデルタフロント堆積物の上面が標高 0 ～ 1m となっている範囲には、中世末期において舟が入り込む深い水深を有する水域は想定することは困難であり、埋没凹地が存在する部分の水域を利用せざるを得ないと思われる。当時の水深は最大でも約１ m 前後であると推定できるであろう。この水深１mの水域が港湾として適切かどうかの議論は、歴史学・考古学分野の専門家に委ねたい。

Ⅵ. おわりに

本調査では、洲崎館跡周辺の中世末期の地形環境を、ボーリング調査、ボーリングコアの各種分析、測量から得られた地形データを基に検討を行った。その結果は、以下に要約できる。

縄文海進以降、この地域は海域となっていたが、いずれかの時代に内湾は砂州によって日本海と隔てられ、潟湖のような状態になる。その後、天の川や目名川が運搬する土砂（砂礫）によって水域の埋積が進み、約 1600 年前前後には最下流部まで埋積が到達する。さらにその後、天の川、目名川はデルタ上で流路を激しく移動する。その過程で、中世末期には、洲崎館跡周辺には本流から取り残されたような水域（水深１m前後）が存在し、外海と通じるような環境にあったと推定される。

本報告では、向浜地区の埋没河道の一部の分布しか明らかにすることができなかった。図 13 は、慶応年間に描かれた絵図を、向浜橋、江差街道の分岐点等を基準に GIS を用いて、現在の地形図との比較を行ったものである。現在の目名川の流路および堤防の位置は、この慶応年間の絵図の河川の位置と重なっている可能性がある。この絵図が描かれる約 400 年前の中世末期においても河道の位置が変化していない場合には、当時の流路がすでに目名川や堤防建設によって破壊されている可能性もある。今後、洲崎館跡周辺の中世末期の港湾施設を検討するにあたり、現在の目名川の左岸側の地域を含めて、今回明らかになったような埋没凹地（河道）に注目しながら洲崎館跡周辺の沖積平野の地形調査をすることが必要不可であると思われる。

参考文献

海津正倫・斉藤享治（2001）低地地形。米倉伸之・貝塚爽平・野上道男・鎮西清高編「日本の地形１総説」東京大学出版会、238-251。

井関弘太郎（1983）「沖積平野」東京大学出版会、145p.

上ノ国町教育委員会（2001）町内遺跡発掘調査事業報告書Ⅳ「洲崎舘跡内外分布調査　比石館跡内外分布調査字向浜地区分布調査」

小池一之・町田　洋（2001）日本の海成段丘アトラス。東京大学出版会、105p

佐藤裕司（1995）イオウの分別化学抽出と珪藻分析による古環境解析。―兵庫県気比低地のコア堆積物を例に―。第四紀研究 , 34, 101-106。

町田　洋・新井房夫（2003）「新編火山灰アトラス」東京大学出版会、269p。

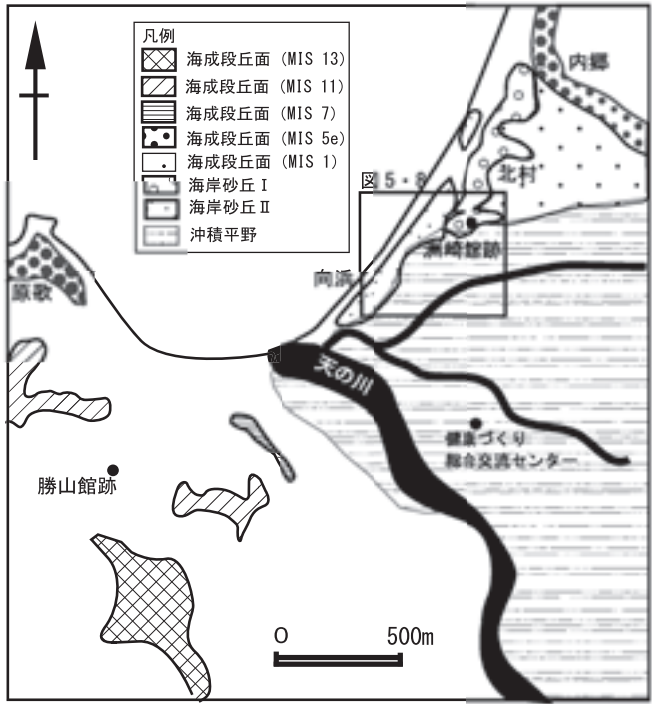


図１　上ノ国町における地形分類図

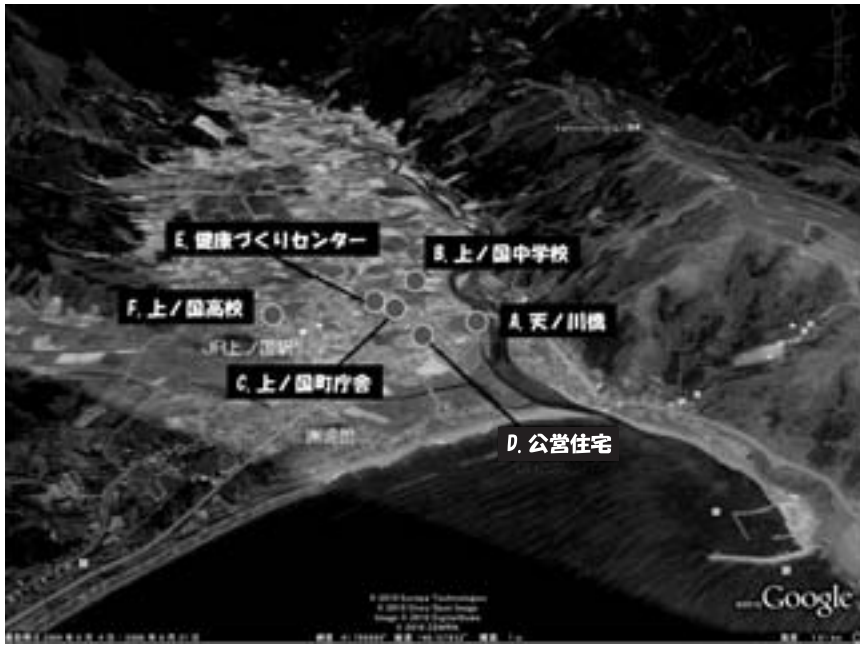


図２　上ノ国町の鳥瞰図と既存ボーリング位置（Google Earth で作成）

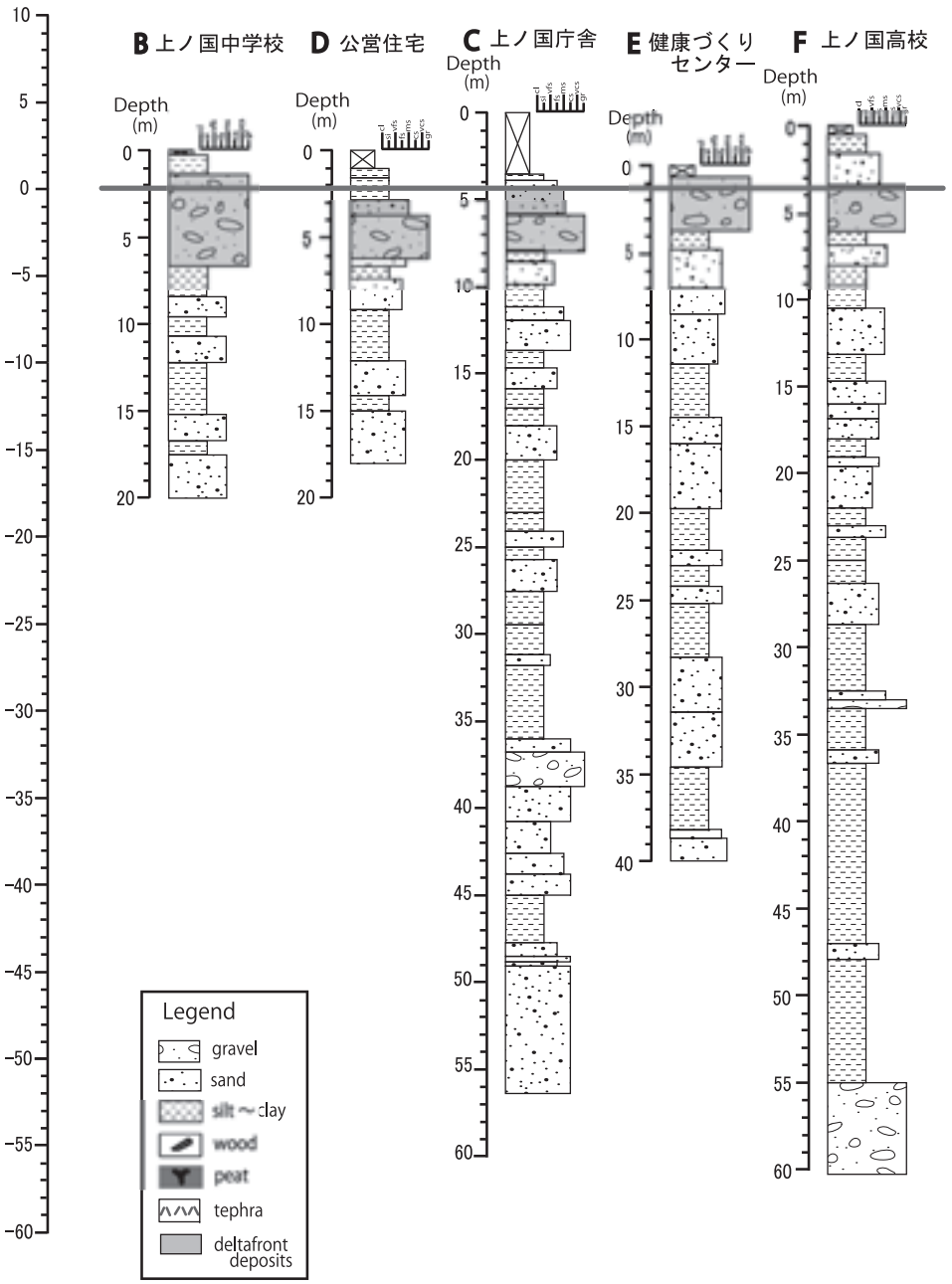


図３　上ノ国町における既存ボーリングの柱状図

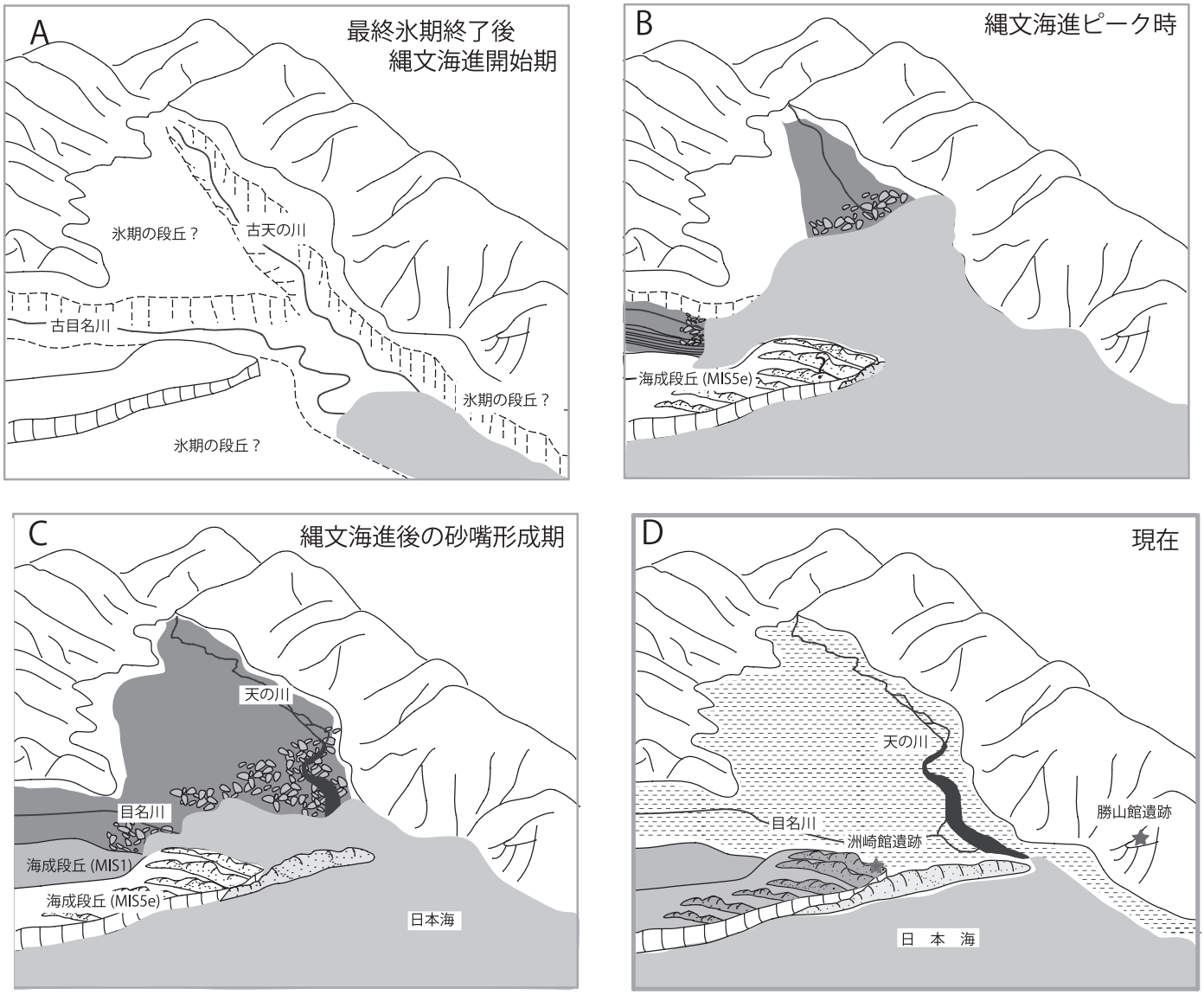


図４　上ノ国町周辺の地形発達模式図

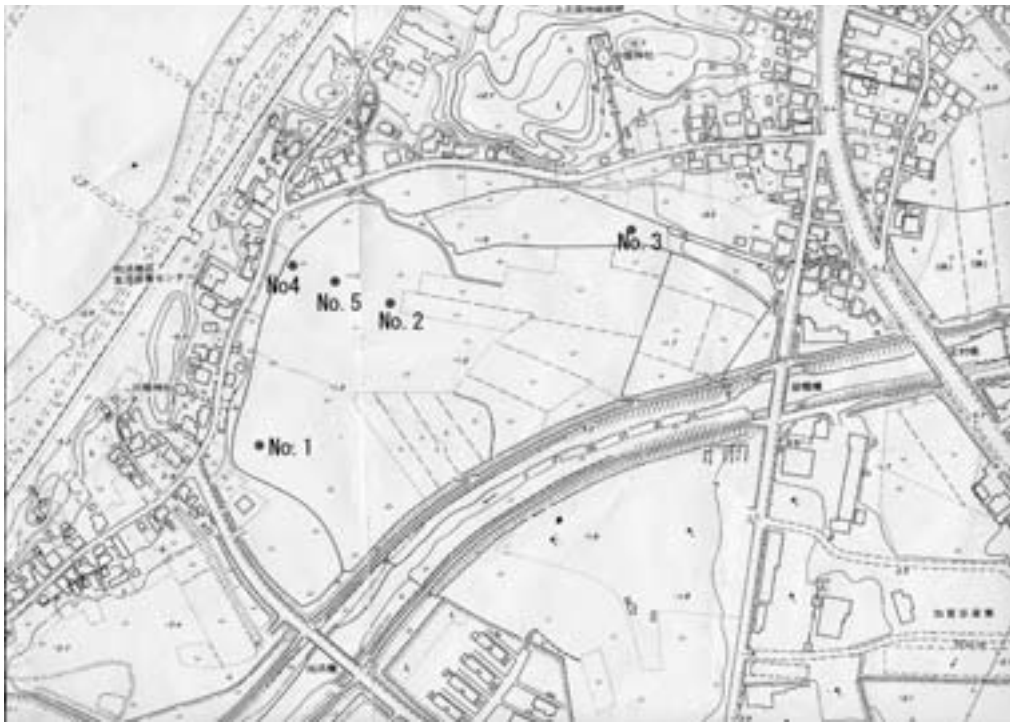


図５　向浜地区における機械ボーリング地点

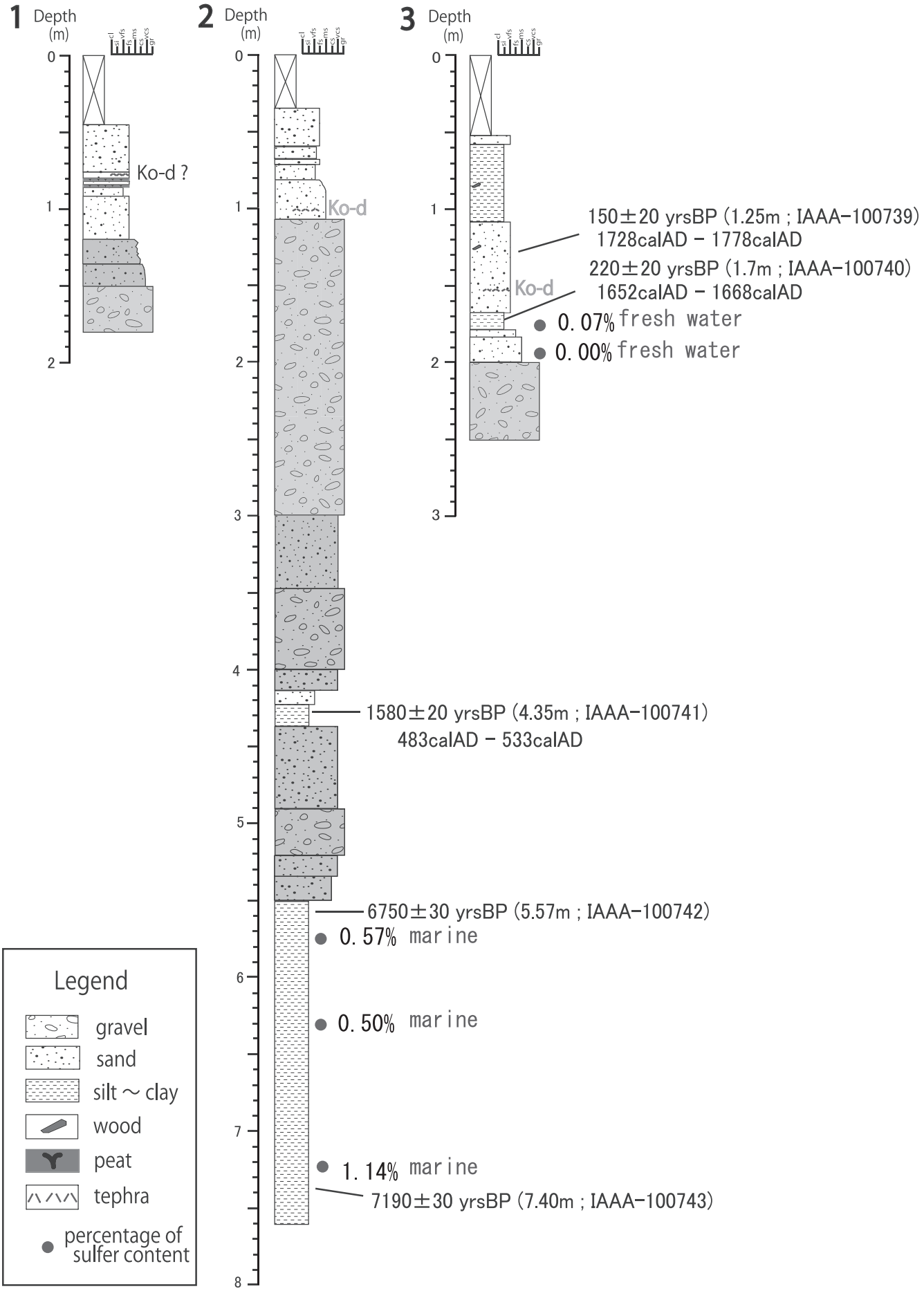


図６　向浜地区の機械ボーリング柱状図

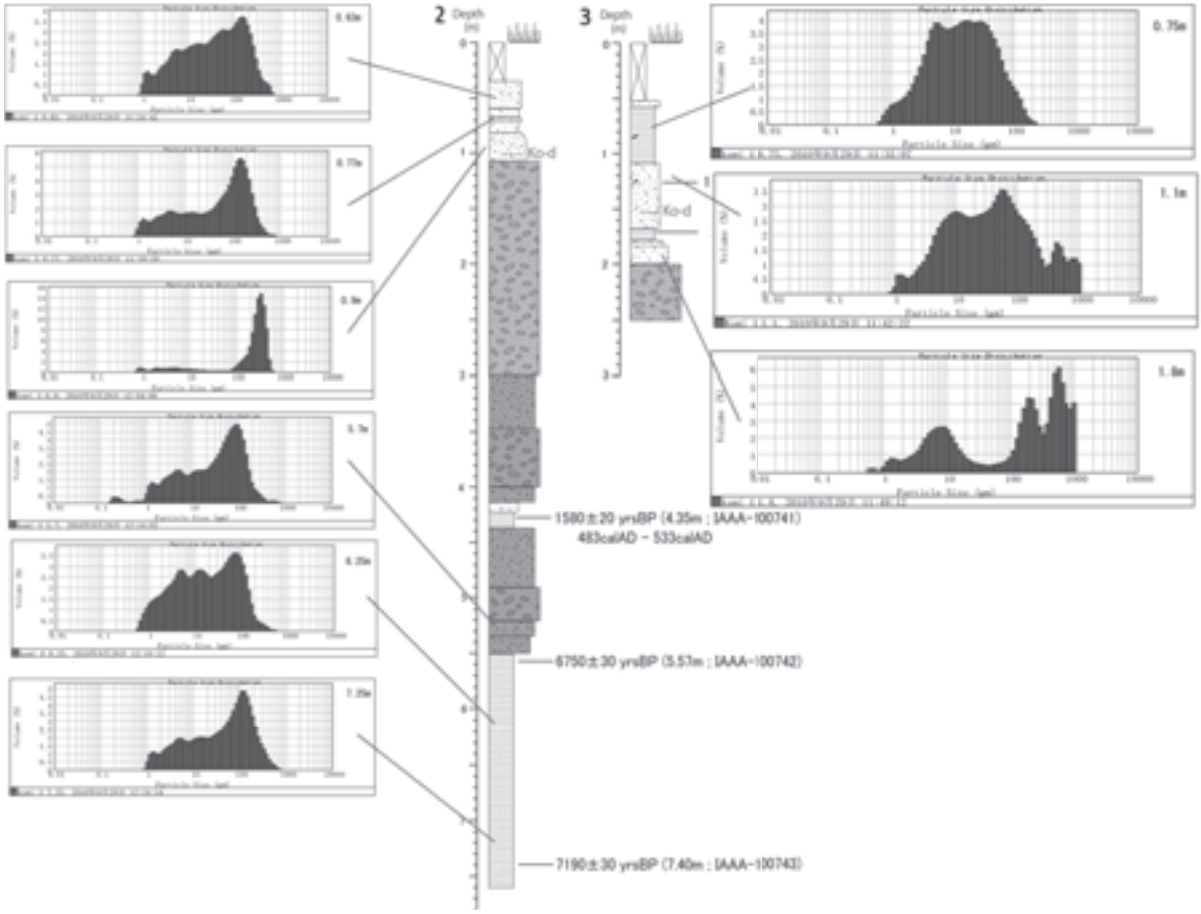


図７　向浜地区ボーリングコアの粒度分析

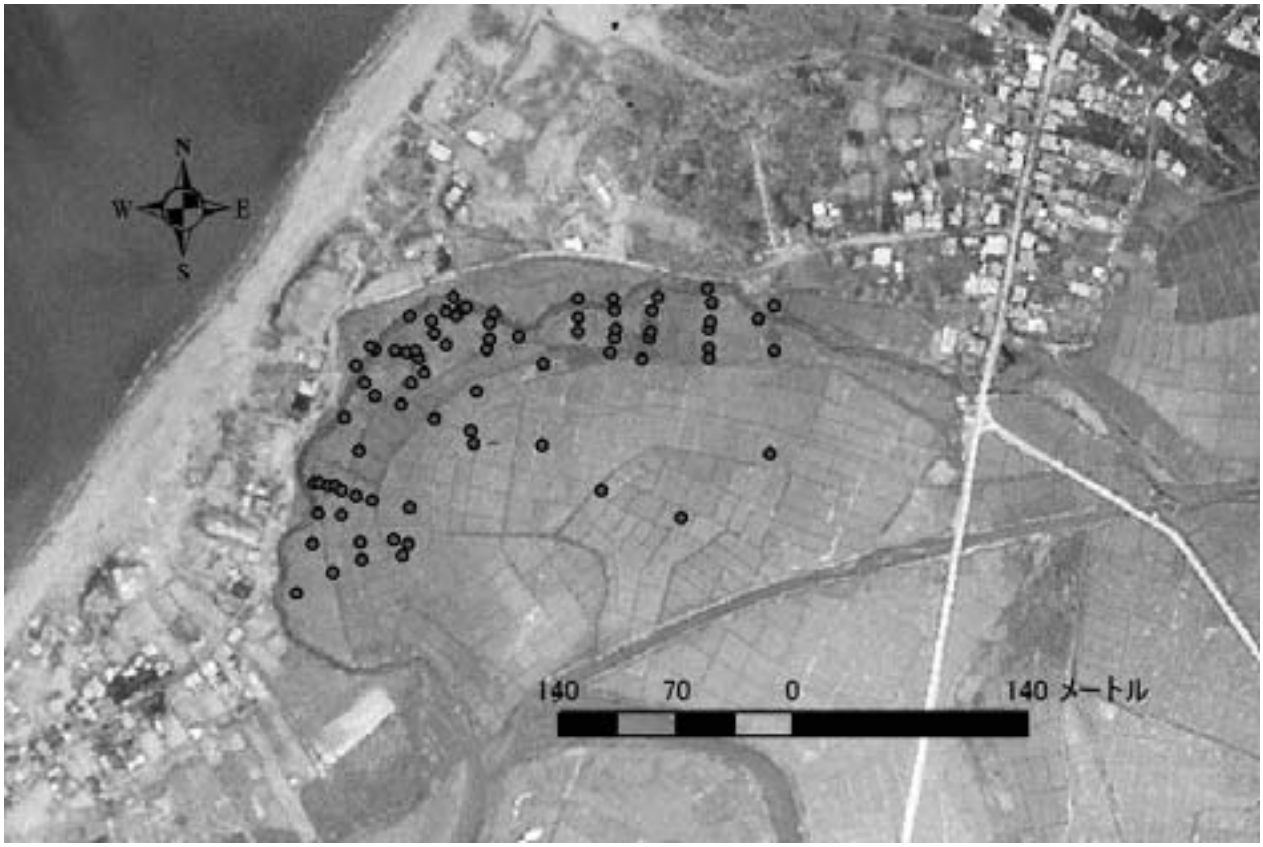


図８　ハンドオーガーによるボーリング地点　航空写真は陸軍撮影（昭和23年）のものを使用

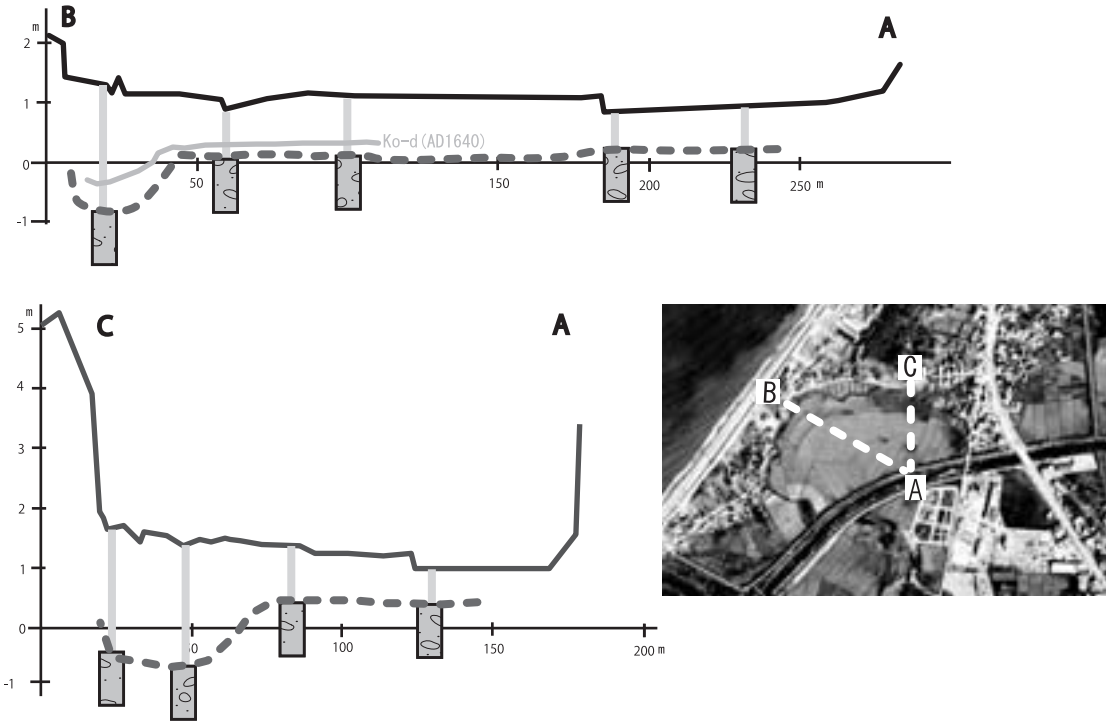


図 9　向浜地区の地形地質断面図

図10　向浜地区のデルタフロント堆積物の上面高度

図11　向浜地区で復元された埋没凹地の鳥瞰図
ArcView 10 および ArcScence で作成

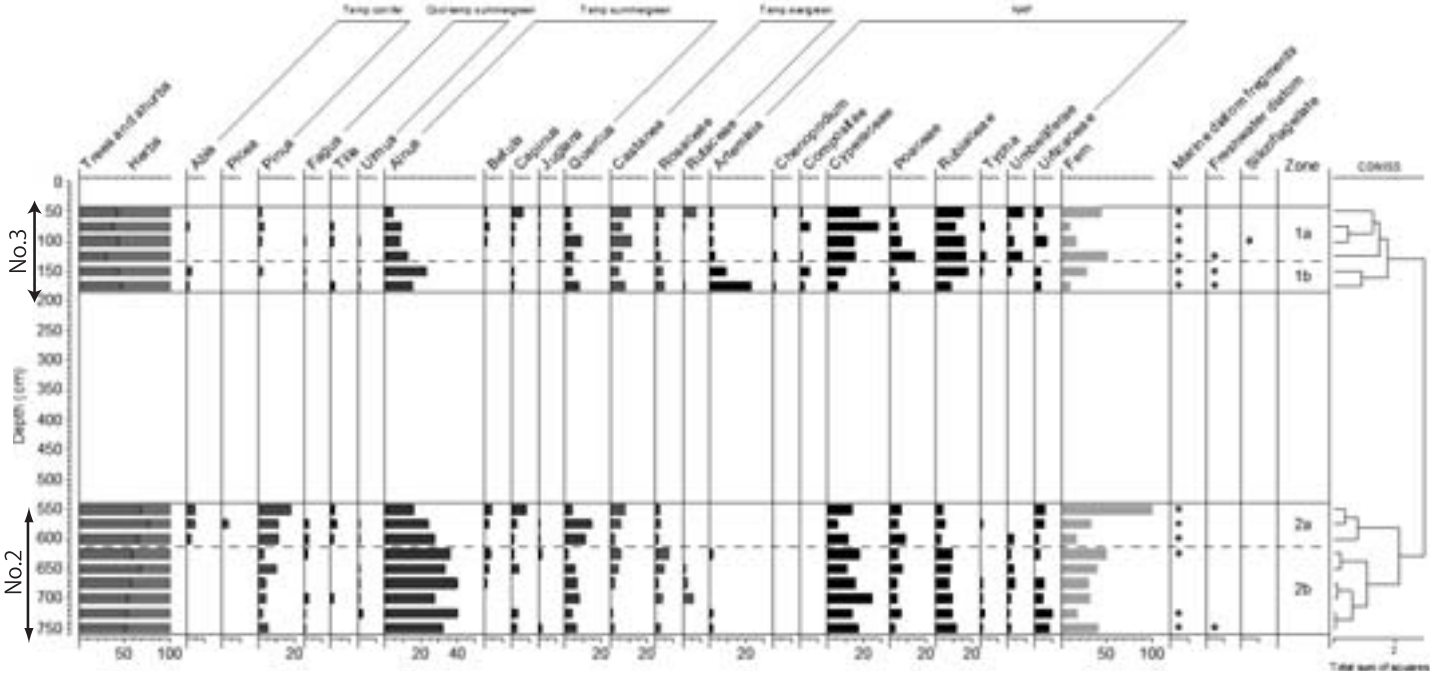
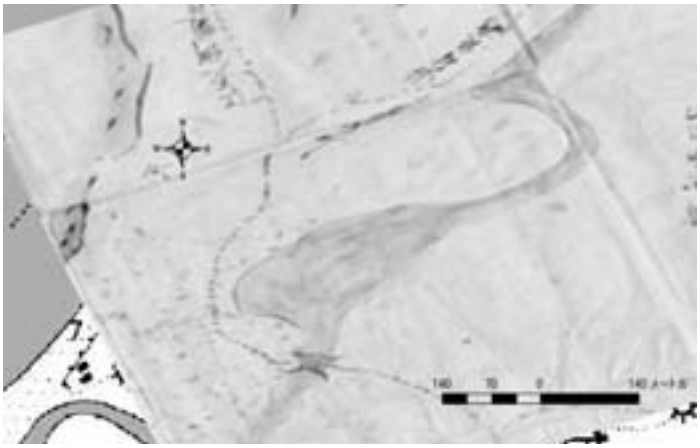


図12　向浜コアの花粉・珪藻ダイヤグラム



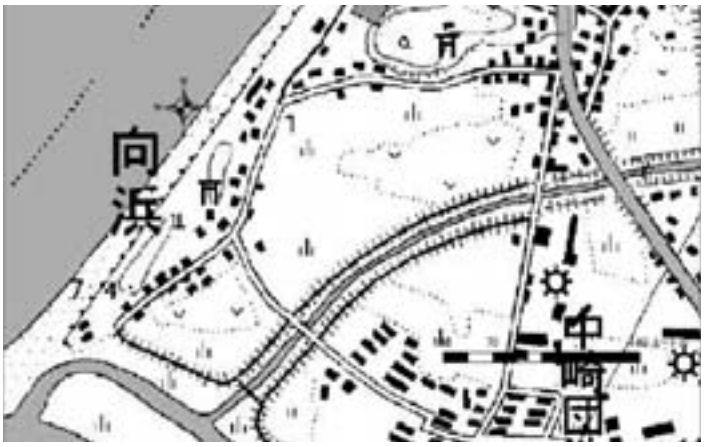


図13　慶応二年（1866）の絵図（左）と現在の地形図（右）の比較
ArcView10 により重ね合わせを行った